

---

# 恋しがりの黒

中納黒姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋しがりの黒

### 【Nコード】

N21111Y

### 【作者名】

中納黒姫

### 【あらすじ】

美しい青年、咲神黒羽は、偶然知り合った水無月流宇子からヌードモデルをしないかと誘われる。

## 出会い（前書き）

三角関係のお話でございます。マクロスFでは、優柔不断な主人公アルトにやきもきさせられました。それを画家の男を、ヌードモデルの男と学生時代からの腐れ縁の女性で取り合うというお話です。BLですが、きわどい描写はないです。正直、エロって苦手なんです。私がエロくないからですかねww

## 出会い

吹き付けた冷たい秋風に、黒羽は、くしゅんと可愛らしくしゃみをした。きよろきよろと周りを見渡し、20過ぎの男がするには可愛らしすぎるくしゃみが誰にも聞かれなかったことに少し安堵した。薄着だったかなと、黒のカットソーを纏った細い二の腕を撫でる。下は、バーゲンで買った同じく黒の細身のパンツ。足元は黒のレースアップブーツ。黒づくめの格好だ。パーカーが何か羽織り物を持つてくればよかったと、今更ながら後悔した。黒羽は、近所の城址公園の近くを歩いていて、城址公園を2重の堀が囲っている。咲神黒羽は、その堀と堀の間の歩道をのんびりと歩いていた。周りには、犬を連れたり、ジョギングをしている20代から30代の男女や、ウォーキングをしている中高年の姿がちらほらとある。適度に入通りが多いので、歩いていても不安にならない。東和市は、現在、通り魔事件やら、連続墜落死事件で騒がしい。男の黒羽も、人気のない道などはなるたけ避けるようにしていた。2つの事件とも犯人は捕まらず、被害者だけが増えていく。警察でもない、ただの一般市民である自分は、自分が被害者にならないよう祈るばかりで何もできない。なんとなく憂鬱な気分になってしまった黒羽は、気分転換にあそこに行こうと思いついた。あそことは、最近見つけた画廊のことだ。散歩の途中に偶然立ち寄って以来、折を見ては尋ねて行っていた。あまり美術に明るくない黒羽から見ても、その画廊に置かれている作品は、見るべき価値のあるものだと思え、いつまで見ても飽きなかった。それに、画廊のオーナーである羽瀬川さんという老人と、コーヒー片手によま話するのが、絵画以上の楽しみだった。羽瀬川さんは、60過ぎだろうが、真っ白い髪に、いつもモスグリーンや紺、臙脂など美しい色のセーターを洒脱に纏っていた。黒羽は、歩みを速めて画廊へと向かう。

画廊の入り口には、意外なことに先客がいた。黒羽が訪れる時は、

いつも客の姿はなかったのだが。珍しいと、黒羽は先客を観察する。彼女は、小さな鏡を片手に、手グシで乱れた髪を直していた。少し離れたところにいる黒羽には気づいていない。黒羽の推測では、20代後半くらいの女性だった。28・9といったところか。ウェーブがかつた淡い色の髪をさっぱりとしたショートにしている。ベージュのパンツスーツに、インナーは若草色。胸元にはシンプルなシルバーのネックレスをしている。すっと伸びた背筋が見ていて気持がよい。バレエをやっていたのかもしれないと、黒羽は思った。彼女が、ふつと黒羽の方を振り向いた。美人という印象より、好奇心の旺盛さが第一に伝わってきた。アーモンド形をした大きな瞳が、あなただあれと問いかけているようだ。黒羽は根負けしたような気分になって、口を開いた。

「あの、初めまして。咲神黒羽と言います。黒に、羽って書いて黒羽」

初対面の相手と話すのは苦手だ。社交的な性格ではないと自分でも自覚していた。こういう時にどう振舞っていいかいつも戸惑ってしまふ。

「素敵な名前ね。あなたの雰囲気にはびっくり」  
女性は、にこりと笑った。黒羽もつられて、ぎこちなく笑う。どういふ表情をしていいかわからなかった。誰もが心を開いてしまいそうなあけっぴろげな笑みだ。黒羽はそんな笑みを浮かべることのできる女性を羨ましく思った。きつと多くの人に愛されてながら育ったのだらう。

「ふふふ。あなたが噂の美青年ね。羽瀬川さんから聞いてたの。最近、とんでもなく美形の子がしけたこの画廊を熱心に訪れてるってまさか実物に会えるとは思ってもみなかったわ。これも天の配剤ってやつかしら。ほんと綺麗ね。肌なんかつやつやだし。化粧水とか使ってるの？髪も天使の輪ができてる。私、髪パサパサしがちなよね。モデルか何か？それとも芸能人？私、ファンになっちゃおうかな」

一気にまくしたてられ、黒羽は目をぱちくりさせる。

「…モデルでも芸能人でもありませんよ。ただのフリーターですよ。コンビニと本屋のバイトを掛け持ちしてて」

黒羽は自嘲気味に言ったが、女性は意に介してないようだ。

「話したいことは山ほどあるの。中入りましょ。羽瀬川さんとは長い付き合いなのよ。私、これでも昔美大に通ってて、作品を展示してもらったこともあるのよ。あの羽瀬川スペシャルコーヒーを飲みながらお話ししよう」

女性に背中を押されるように、画廊へと足を踏み入れた。

ちらちらと横顔をうかがいつつ、なんだか今まで会ったことのないタイプの女性だと、黒羽は思った。黒羽の関わった女性の数などが知れてるが。

「あの、お名前聞いてもいいですか？」

遠慮がちに黒羽は尋ねた。

「水無月流宇子みなづきのりょうこ。変な名前でしょ。でも気に入ってるんだ」  
よく笑う人だなと、黒羽は思った。

「そんなことないですよ。綺麗な名前だと思います」

黒羽は気恥ずかしくて、早口で言った。

「こんにちは、おじさん」

「ルウちゃん、訪ね人に会えたみたいだね」

「おじさん、ちょっと向こう行ってよ。黒羽君とナイショの話があるの」

「口説くつもりかい？若いねえ」

「そうよ。口説き落とすの」

流宇子は挑発的な口調で言った。黒羽は、視線をさまよわす。助けを求めるように奥でコーヒーを淹れているオーナーの方を向くが、穏やかな笑みを浮かべているばかりだ。

「ねえ、黒羽君。バイトの時給っていくくら？」

「えっと、本屋が800円で、コンビニが870円です…」

言って、黒羽は情けない気分になる。流宇子には笑ってしまうよう

な額だろう。服には詳しくないが、流宇子の纏っているパンツスーツは、黒羽の月給ではとても買えない代物だろう。

「その安いちんけなバイトを辞めて、もっと儲かるバイトしてみない？」

流宇子が身を乗り出す。端正な白い顔には、面白いいたずらを思いついた悪ガキみたいな表情が浮かんでいる。

「儲かるバイト…ですか」

黒羽は流宇子の言葉をぼんやりと繰り返す。顔が近いので、なんとなく気恥ずかしい。

「そう。画家のモデル。ありむらりゅうせい有村劉生ありむらりゅうせいって知ってる？」

「いいえ。有名な画家なんですか？」

「ん」と言っ、流宇子は首をかしげる。

「今売り出し中の画家。こっちの業界では天才って言われてるわ。

これからもっと売れると思う。本人もイケメンだしね。女性誌なんかで取り上げてもらったら、知名度もあがるんでしょうけど。本人がマスコミ嫌いでね。美人の裸婦像ばかり描いてる画家よ」

「はあ」

なにやらすごい画家で、流宇子が高く評価しているということだけは把握できた。

「その美人の裸婦像を描いてる画家のモデルをなんで僕に？」

「壁を乗り越えさせるためよ」

流宇子は真剣な口調に、自然と、黒羽も姿勢を正す。

「有村劉生は、美人画しか描こうとしない。そんな小さな檻に収まる才能じゃないの。彼の才能は。あたしは、有村劉生の描く男が見てみたい」

流宇子は、目を真摯に強く輝かせていた。その光が黒羽には眩しい。多分水無月流宇子には有村劉生という画家に恋をしているのだ。思わず、目を落とした。

「あの、有村さんと水無月さんってどういう関係なんですか？」

流宇子は、一瞬硬い表情を浮かべた。黒羽は、尋ねた事を少し後悔

した。自分で傷口を広げるようなものだ。

「付き合ってる…のかな？」

「そう…ですか。モデルの件、考えさせてください」

「劉生の画集届けるから。それを見てから決めて」

流宇子に住所と連絡先を伝え、流宇子は仕事があるからとビジネス手帳を片手に去って行った。

黒羽は、その颯爽とした後ろ姿をじっと見つめていた。

## 黒羽の鬱屈

ついてない。まったく咲神黒羽はついてない。一目ぼれとまでいかないが、初対面で強く惹かれた女性には、イケメンの画家の恋人がいた。しかも、その画家のモデルをしろという。一方で、流宇子をあれだけ真剣にさせる有村劉生という画家にも少しだけ興味があった。どんな男なのだろう。才能があつて、容姿にも恵まれ、美人で魅力的な彼女のいる男。いずれにせよ、黒羽とはかけ離れた男であるに違いない。

流宇子のくるくる変わる表情を思い浮かべたり、まだ見ぬライバル有村劉生の事を考えているうちに、自宅に着いてしまった。思ったより、帰宅が遅くなってしまったので、身が狭い。一本遅くなるとメールをいれておけばよかったと後悔したが、後の祭りだ。日も暮れて、すっかり気温も冷え込んでいた。家に帰って温かい料理にありつきたいものだ。

黒羽は、おざなりにチャイムを押した。

「イリヤ、帰ったよ」

ドアに向かって、声を張り上げる。

「あいあい、今開けますよお」

双子の姉であるイリヤが、すっぴんで、スウェットという家族以外には見せれない姿で顔を出した。

イリヤはパートで、会社の受付嬢をしている。美人というのではないが、女性らしい好感のもてる顔だちをしている。合コンではいつも人気だと本人が自慢していた。

「黒羽、今日は牛肉いっぱいのカレーだよお」

いつもテンション高いなど、黒羽は感心してしまう。疲れないのだろうかという疑問も湧く。

「ぶっん」

「反応薄っ。せっかかない肉買ってきたのにい。黒羽肉好きでしょ。」

この肉食獣め」

イリヤがふざけて、蹴りを繰り出して来たので、無言で避ける。

「うー、なんかやなことあった？」

一転心配そうに聞いてくる姉。

「いいことと悪いことがあった。ごめん。今は話したくないや」

姉の好意を冷たく跳ねのけ、夕飯のカレーを一人黙々と食べる。

イリヤは、弟の事は放っておくことにしたのか、ソファの上で膝を抱えて、恋愛もののドラマに口をぽかんと開けて見入っている。ミアとリンネは、自室だろうか。黒羽は、食べ終わると早々に自室に引き上げ、パソコンを立ち上げると「有村劉生」で検索する。かなりのサイトが出てきた。個展の感想をのせたブログなんかも出てきた。一番上にでた公式サイトをクリックする。公式サイトの経歴のあまりの見事さに、黒羽は机に突っ伏す。時給800円のフリーターが太刀打ちできる相手ではない。これ以上、サイトを見る気にはなれなかった。劣等感で押しつぶされそуд。有名美大在学中に若手作家の発掘を目的としたシエル賞を取り、画家としてデビュー。在学中に、銀座で個展も開いている。サイトには、有村劉生本人の写真も載っていた。肩のあたりまで髪を伸ばし、黒ぶちの眼鏡をかけている。優男という感じはしない。白いシャツに、ベージュのチノパン。長い前髪の間から覗く、切れ長な鋭い瞳が忘れられない印象を残す。思った以上のいい男だった。

これでは、水無月流宇子が夢中になるのも仕方がないなと黒羽は自嘲気味に思った。いやなことがあった時は、寝るに限る。これが黒羽の持論だ。問のいいことに明日はバイトが休みだ。ゆっくり朝寝坊しよう。明日になれば、またいつもの退屈な自分に戻れるはずだ。黒羽は、椅子に座ったまま猫のように伸びをすると、風呂場に向かった。

ベッドに横になったが、流宇子の様々な顔がちらちらと浮かんで、なかなか寝付けなかった。有村の前で、彼女はどんな表情をするのだろうか考えると、かすかに胸が痛んだ。

ようやく寝たのが2時過ぎで、起きたのは11時過ぎ。当たり前だが、パートで、受付嬢のイリヤも、外資系でバリバリ働いてる母も、私立のお嬢様学校に通うミアとリンネもすでにいなかった。ちなみに父は、単身赴任中だ。一人きりの家は、どこかよそよそしく感じられた。

あまり空腹を感じなかったので、ヨーグルトと紅茶だけで朝食をすます。

テーブルには、咲神黒羽様と角ばった字で書かれた厚い封筒が置かれていた。流宇子が届けると言っていた画集だろう。手でびりびりと封を破り、画集を取りだす。表紙の絵に、黒羽は吸い寄せられた。流宇子が言っていたように、美しい女性のヌードである。しゃがんだ女性が斜めから恨めしそうにこちらを睨みつけている。背景は重い黒で、蒼白い肌が一層不健康に見えた。黒羽の想像していた美人画とは、まったく違っていた。なんだろう、この感覚。黒羽は自分のつたない語彙を探す。寂寥、寂寞。そんな言葉が浮かんだ。実物を見る前は単に美しい女性が描かれた絵としか思っていなかったが、その程度の才能では絵だけで食べていけないだろう。黒羽の素直な感想で言うなら、有村劉生はまさに天才だった。黒羽はやる気持ちで、画集のページを繰り、じっと見つめる。その作業を繰り返し、薄い画集を

何時間もかけて見終わった。この絵を生で見たい。そして、この絵を作り出した有村劉生に会いたい。黒羽は切実に思った。

## モデルの条件

黒羽は、しばらく放心していたが、はっとして携帯に手を伸ばした。水無月流宇子からは、いつでも電話してくれて構わないと言われていた。あいにく留守電だった。留守番電話にメッセージを吹き込む。「咲神です。有村劉生の画集見ました。流宇子さんが入れ込むのが分かります。僕もすごく惹きつけられました。有村劉生に会ってみたいですよ。だから…だから僕なんかでよかったら、モデルやってみたいですよ」

留守電を終え、ほっとした反面、これでいいのかという疑念も頭をよぎった。

興奮して、ノリでモデルを引き受けると言ってしまったんじゃないか？今までモデルの経験なんてないし。いろんな考えが頭の中を交錯する。

画集は、自室の本棚のお気に入りを置くスペースに置くことにした。ベッドに勢いよく倒れこむ。白い壁が妙に白々しい。

有村劉生は、どんな風に自分を描くのだろう。確かに流宇子言うように見てみたかった。

数分して、流宇子から電話があった。

「もしもし、黒羽君？モデルの件ありがとう。明日空いてる？早く劉生に黒羽君を会わせたいの。S駅の改札口に10時に待ち合わせでどうかしら？ごめんね、急だった？」

矢継ぎ早に言われ、黒羽は戸惑う。S駅の改札口に10時。心の中で復唱する。

「いえ、僕も有村さんに早く会ってみたいです」

黒羽としては珍しくきっぱりと言いつつ切った。

「あ、そうそう。モデルのバイト代なんだけどね、時給5000円でどうかな？」

「っそんなに貰えるんですか」

黒羽は叫んだ。今のバイトの日給並みだ。

「時給の相場が3000円くらいかな。劉生は売れっ子だから。なんならもつと出そうか？」

「いえ十分です。あの、どんな格好してたらいいですか？」

名のある画家に描いてもらうのだ。どういう服装をしていったらいいか皆目見当がつかなかった。

「普段着でいいわよ。黒羽君自分に似合うもの分かっているみたいだし」

くすりと、流宇子が笑うのが聞こえた。流宇子の笑い声に、頬が熱くなる。

「じゃあ、明日S駅で」

「はい。失礼します」

待ち合わせなんて、少しデートみたいでわくわくした。流宇子さんはどんな服を着てくるのかとかくだらないことを想像して、日長過ぎた。

翌朝、黒羽は緊張していた。30分も前に、待ち合わせのS駅に着いてしまった。時計をいろいろと何度も眺め、時間が経つのを待つ。

「もしもし、流宇子さん？」

「ごつめん。黒羽君、寝坊してしまいました」

10時きっかりにその電話はかかってきた。

「劉生、時間にはうるさいから、黒羽君、先行ってて。あたしも後から追いかけるから。携帯に地図送つとくから。それに分かりやすい場所だから。わかんなかったら、また電話して」

どの電車に乗り、どの駅で降りたらいいかを一方的に言うと、電話は切れた。黒羽は、心もとない気分ですぐ電車に揺られていた。それにしても流宇子さん、モデルと画家の初対面という大事に寝坊とは。

案外そっかしい人なのかもしれないなど、黒羽は思った。「画家という人種には、未だお目にかかったことがないし、今まで接点もない。なんとなく気難しそうな印象がある。ゴツホとか耳切ったり、

自殺しちゃったり。流宇子さんも時間にするさいと言っていたし。まあ、時間にするさい人間なんて五万といるが。服装は色々悩んだ末、黒のボートネックカットソーに、ジーンズという定番のスタイルにした。足元はゴツめのワークブーツ。有村劉生がどんな男か、この目で見定めてやる。降りる駅はもうすぐそこだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2111y/>

---

恋しがりの黒

2011年11月5日02時13分発行